

時代変化の意味を探って

金井 光太郎

KANAI KOTARO

東京外国語大学大学院総合国際学研究院

Tokyo University of Foreign Studies, Graduate School of Global Studies

Quadrante, No.20 (2018), pp.193-197.

退職を機会に研究業績をまとめてみると、性格をよく反映して大きな山谷があったことが分かります。修論をまとめて 1982 年に公刊論文とした後に最初の谷を迎えました。次の研究業績は 1987 年までありません。助手就任から留学期間と重なりますが、そうした環境の変化のためというよりも、テーマが見えなくなったことが理由でした。修論では、ニューイングランド植民地の共同体に恭順の政治文化が働いていたことに注目して階層社会の変化と革命を位置づけることができました。アメリカ入植に関してフロンティア的な個人と合意という理解が強かった日本の学界では、画期的な解釈だったとうぬぼれています。ところが、そこからさらにアメリカ史研究でどのような重要な課題があるのか、どこにその切り口があるのか、模索が続きました。留学もやりがいのあるテーマを見つけるのに苦心して史料を着実に収集し読み進めることができませんでした。そんな状況に大きな刺激をくれたのが近代イギリス史の授業でした。E.P.トムソンをはじめ、18 世紀イギリス社会が市場化する中で地域ではどのような対抗・緊張関係があったか、極めて興味深い研究をたくさん読まされました。他に、ローレンス・ストーン、キース・トマス、ジョン・ブルーワなどなど。そこでやっと、所有や市場が単純な発展ではなく、地域の民衆的世界観を壊して近代社会が創造された歴史を、アメリカでも深く知りたいと思うようになりました。そこで、1987 年から 1996 年の単著の完成までをピークに一気にアメリカ・ニューイングランド植民地で民衆的な共同体と近代的な国民国家・市場社会との相克をテーマとして研究を発表してきました。

しかし、単著を書き上げたことで、また研究の

谷に入り次のテーマを模索することになりました。ちょうど外大に移籍した頃です。本格的な論文執筆はやっと 2005 年になります。9 年ほど知的に取り組むべき問題を考え求める時期が続きました。その間に、以前のテーマからまとめて公刊したもののや史料の解説、洗練文化に刺激を受けて書いた論文などがありましたが、渾身の論考はカール・シュミットに刺激を受けたアメリカの世紀論です。しかし、これも課題追求の途上で、外大での科研に加えてもらうことを通じて国民国家の構築、歴史の記憶の問題で大きく刺激を受けながら新たなテーマが見えてきました。さらに、留学時代の指導教授ゴードン・ウッド氏がフランクリンについて書いた、洞察の深い、しかも読んで面白い著作から大きな刺激を受けました。フランクリンが連合王国としてのイギリスの国民国家構築時代を生きた人物であり、彼自身独立アメリカ国家の構築に関わったことから、コスモポリタニズムとパトリオティズムの関係という新たなテーマを見つけることができました。

以前のテーマは、中世にも通ずる面のあるヨーロッパの共同体的世界を植民地時代のアメリカに見つけその変化を意味づけてゆくことに大きな関心がありました。現在のテーマは、合衆国がどのような歴史的過程を経て諸地域の共同体的な世界から国民国家を構築していったのかに焦点を絞っています。時代でいえば 19 世紀の初期から前半を中心に考察しています。国家性を探る切り口として 1812 年の戦争、モンロー・ドクトリンも新たな見方で分析してきたつもりです。独立によって獲得した主権国家の地位も、国際社会の中で行動するには厳しい規範がありそれを守れない国として不平等の地位に甘んじざるをえませんでした。ま



たアメリカ合衆国の場合は、地域共同体を国民国家に包摂してゆく中でとりわけ大きな問題となったのがインディアンの問題でした。所有と契約という市場の法の均質化された場が近代国民国家です。イギリス社会で **ungovernable** な民衆的世界の包摂は厳しい抑圧がありましたが、インディアンの場合さらに全く別の世界観に生きており排除されてゆきました。北アメリカでまだ国家構築途上の間は、インディアンも諸帝国の競合関係を巧妙に利用して同盟関係を働かせて何とか対抗していたものの、1820年代に英米・米西関係が確定したことで国内は圧倒的な多数派が一方的に土地を奪うことが可能となりました。最近では、この内外に対する国家権力構築の効果を考察し研究していたところでした。

そこにコリン・ウッドワード氏の著作から大きな挑戦を突きつけられました。アメリカ合衆国は決して一つの国ではなく、11の国からなるEUのような連合体にすぎないとの視点です。確かに言われてみればアメリカ史の解釈や現代アメリカの課題についてその視点から見れば納得できる点が多く、「ではアメリカ合衆国の建国とは何だったのか」という根源的な問いを、改めて考察してゆく最後のテーマに出会えたと受け止めています。

研 究 業 績

金井 光太郎

I. 著書（単著）

1. 『アメリカにおける公共性・革命・国家—タウン・ミーティングと人民主権との間』木鐸社, 1996 年, 255pp.

II. 編纂書（共編著）

1. 「マサチューセッツ共和国の形成—恭順による秩序から「政治」による支配へ」 阿部斉・有賀弘・本間長世・五十嵐武士編『アメリカ独立革命：伝統の形成』東京大学出版会, 1982 年, pp.195-232.
2. 「市場・債権・憲法：アメリカ合衆国憲法の社会史的解釈」小川晃一・片山厚編『アメリカ憲法の神話と現実』木鐸社, 1989 年, pp.191-216.
3. 「英領 13 植民地の独立と連邦共和国の建設」歴史学研究会編『近代化の分れ道—南北アメリカの 500 年』青木書店, 1993 年, pp.57-79.
4. 「革命期マサチューセッツにおける既得権と多数決」金井光太郎他『常識のアメリカ・歴史のアメリカ—歴史の新たな胎動』木鐸社, 1993 年, pp.23-74.
5. 「アメリカ独立革命と共和政の確立」野村達朗編『アメリカ合衆国の歴史』ミネルヴァ書房, 1998 年, pp.31-54.
6. 金井・富田理恵「スコットランドとアメリカ植民地の選択」近藤和彦編『長い 18 世紀のイギリス その政治社会』山川出版社, 2002 年, pp.187-198.
7. 「アメリカを創る—独立戦争を通して」アメリカ史学会編『原典アメリカ史—社会史資料集』岩波書店, 2006 年, pp.70-82.
8. 「独立宣言」「合衆国憲法」など 20 項目, 歴史学研究会編『世界史史料』岩波書店, 2008 年.
9. 「セルフメイドの国民性と市民：アメリカにおける臣民・市民・国民」立石博高編『国民国家と市民：包摂と排除の諸相』山川出版社, 2009 年, pp.68-91.
10. 「フランクリンに見るイギリスの国民形成とアメリカのアイデンティティ」金井光太郎編著『アメリカの愛国心とアイデンティティー—自由の国の記憶・ジェンダー・人種』彩流社, 2009 年, pp.17-40.
11. 「ロックウェルが描いたアメリカ」吉田ゆり子・八尾師誠・千葉敏之編『画像史料論—世界史の読み方』東京外国語大学出版会, 2014 年, pp.230-234.
12. 「代表制と公共圏—被治者の同意から主権者市民へ」遠藤泰生編著『近代アメリカの公共圏と市民—デモクラシーの政治文化史』東京大学出版会, 2017 年, pp.59-88.

III. 論文

1. “Paper Money Controversy in Colonial New England,” *Nanzan Review of American Studies* IX(1987), pp.33-57.
2. “Rule and Decline of River Gods in Colonial Western Massachusetts,” 『アカデミア』人文・社会科学編 46 号, 1987, pp.69-87.
3. 「幸福の追求と合衆国憲法」『思想』761 号, 1987 年, pp.36-61.
4. 「英国憲法論争と世界観の転換」『アカデミア』人文・社会科学編 47 号, 1988 年, pp.109-140.
5. 「合衆国憲法『原意』論争の社会史的背景：合衆国憲法 200 周年とアメリカ第二共和政」『アカデミア』

人文・社会科学編 48 号, 1988 年, pp.27-56.

6. 「社会史研究における文化の視座：特殊性の認識と全体像」『アカデミア』人文・社会科学編 51 号, 1990 年, pp.69-118.
7. 「マサチューセッツの郡政府とアメリカ革命：社会・法・革命」日本政治学会編『年報政治学 1990 年』, 1991 年, pp.81-110.
8. 「ジャクソン期のナショナリズムによる公共転換—ローカリズムからナショナリズムへ」『アメリカ史研究』15 号, 1992 年, pp.3-8.
9. “The Subject, Innovation, and the Public in Revolutionary New England Debates,” *Nanzan Review of American Studies* XIV(1993), pp.33-52.
10. 「民のモラルと国家の公共—日本、オスマン帝国、イングランドとの比較の視点から」『アメリカ史研究』17 号, 1994 年, pp.26-30.
11. 「回顧と展望（北アメリカ）」『史学雑誌』103 編 5 号, 1994 年, pp.376-380.
12. “Gentility and Self-discipline in the Mansion Home – A Tall Case Clock from Eighteenth-century New England: A Study in Material Culture,” *Nanzan Review of American Studies* XXV(2003), pp.55-63.
13. 「洗練文化から見る資本主義社会の成立とアメリカの逆説」『アメリカ史評論（関西アメリカ史研究会）』21 号, 2003 年, pp.18-26.
14. 「西半球秩序グローバル化としてのアメリカの世紀」『クアドランテ』7 号, 2005 年, pp.62-78.
15. 「1812 年の戦争による大陸軍の記憶再編と国民国家神話の確立：レパブリカニズムの政治文化からナショナリズムへ」『クアドランテ』10 号, 2008 年, pp.305-323.
16. “Nationalism and the Citizenship in the American Revolution and the Early Republic,” 『クアドランテ』10 号, 2008 年, pp.135-144.
17. “The Two Concepts of Constitutionalism and the Popular Sovereignty: A Comment on Prof. Gray’s “Borderland in the Heartland”” 『同志社アメリカ研究』別冊, 22 巻, 2015 年, pp.69-72.
18. 「アメリカン・システムのマニフェスト—ヨーロッパ公法秩序とモンロー・ドクトリン」『アメリカ研究』49 巻, 2015 年, pp.1-19.
19. “From Frontier Theory to Borderland History: Native American Violence and Violence of the Frontier Theory” 『東京外国語大学論集』93 号, 2017 年, pp.207-218.
20. 「国民国家アメリカの創造とプリマスの記憶の神話化」『クアドランテ』19 号, 2017 年, pp.103-115.

IV. 学界動向、書評、エッセイ

1. 「Harry S. Stout, *The New England Soul: Preaching and Religious Culture in Colonial New England*」『国家学会雑誌』101 巻 11・12 号, 1988 年, pp.147-151.
2. 「近世日本の国制における立憲性、公共性、民主性：笠松和比古『主君「押込」の構造』平凡社」『アカデミア』人文・社会科学編 49 号, 1989 年, pp.117-124.
3. 「有賀貞『アメリカ革命』」『史学雑誌』99 編 4 号, 1990 年, pp.81-90.
4. 「個人・主権・憲法—アメリカの建国」『創文』328 号, 1991 年 12 月, pp.1-4.
5. 「Edmund S. Morgan, *Inventing the People: The Rise of Popular Sovereignty in England and America*」『国家学会雑誌』106 巻 7・8 号, 1993 年, pp.244-248.
6. 「ハミルトン・ジェイ・マディソン『フェデラリスト』」『歴史学研究』642 号, 1994 年, pp.59-62.

7. 「Robert H. Wiebe, Self-Rule – A Cultural History of American Democracy」『国家学会雑誌』110 巻 5・6 号, 1997 年, pp.494-496.
8. 「個人主義って、公益のひとつなんです」NTT データ広報誌 “New Paradigm” 21 号, 1997 winter.
9. 「辻内鏡人『アメリカの奴隷制と自由主義』」『アメリカ史研究』21 号, 1998 年, pp.130-134.
10. 「アメリカの中の中世」『阿部謹也著作集』第 3 巻月報 3, 筑摩書房, 2000 年 1 月, pp.6-8.
11. 「シンポジウム「記憶と歴史」傍聴記」『クアドランテ』2 号, 2000 年, pp.81-85.
12. 「アメリカ独立革命」「アメリカ独立宣言」など 42 項目『角川世界史辞典』角川書店, 2001 年.
13. 「斎藤眞先生が築いてくれた場」『斎藤眞先生追悼集 こまが廻り出した』東京大学出版会, 2011 年 3 月, pp.72-77.
14. 「安武秀岳『自由の帝国と奴隷制』: 南部プランターの階級のヘゲモニーとアメリカのデモクラシー」『アメリカ史評論』30 号, 2013 年, pp.30-38.
15. 「留学の孤独と絆の力」東京外国語大学留学生支援の会『会報』46 号, 2014 年 6 月, pp.1-2.
16. 「「ヒストリカル・エリア・スタディーズ」に込めた工藤先生の思い」『クアドランテ』17 号, 2015 年, pp.11-12.
17. 「カリフォルニア大学リバーサイド校に見る歴史教育のアクティブ化」『「地域研究に基づく「世界史」教育の実践的研究」科研最終報告書』, 2016 年 3 月.
18. 「会田弘継著『トランプ現象とアメリカ保守思想』」『産経新聞』, 2016 年 8 月 21 日.
19. 「聴く知性」*GLOBE Voice*, 2016, Number 11, pp.22-23.
20. 「トランプ氏全米巻き込む “ロッカールームトーク”」『日刊スポーツ』, 2016 年 11 月 14 日.

V. 翻訳

1. デーヴィッド・A・ハウンシェル『アメリカン・システムから大量生産へ 1800-1932』名古屋大学出版会, 1998 年, 532pp.
2. ゴードン・S・ウッド『ベンジャミン・フランクリン、アメリカ人になる』慶應義塾大学出版会, 2010 年, 370pp.
3. コリン・ウッドワード『11 の国のアメリカ史一分断と相克の 400 年』岩波書店, 2017 年, 544pp.